信仰と希望と愛に
生き続ける呉教会

Ⅰコリント13章1～13節
2023年3月26日
松田 基子 師

呉教会の牧師として立つ最後の講壇になりました。　31年間、この尊い講壇に立たせて下さった**神様の赦し**と、**呉教会の**皆様の**愛に**、心から**感謝**致します。

最後に当たって、これからの呉教会が、どの様に**歩んで欲しいか**を考えたときに、

『皆さんが一致して、イエス・キリストに依る、信仰と希望と愛に生き続けて、呉教会を更に、**神様の御心に適う教会**に**成長させて戴きたい**。』

との思いに至りました。 先達が、

「わが家の戸は閉じても、教会の戸は閉じない」

と言って、**戦時下の困難**な中も、**信仰**を**守り通し100年の歴史**を刻んで来た**呉教会**です。 そこに、信仰と希望と愛がなかったならば、100年の歴史を刻むことは出来ませんでした。

この呉教会は1918年(大正7年)に、諌山修身(いさやまのぶみ)師、諌山てる夫妻、ウイリアム・エコール宣教師夫妻によって開拓されました。
日本でナザレン教会が本格的に伝道出来る様になったのは、アメリカに渡った3人の青年が、ロサンゼルスのナザレン教会で、信仰を持ち、牧師となって帰国し、宣教師と共に教会を開拓してからの事です。 呉教会の創設者の諌山先生とエコール先生は、その3組の中の1つのグループでした。

諌山先生がアメリカへ行かれるにあたっては、親族会議が開かれ、

『どんな事があってもキリスト教徒だけにはならない様に』

との命令に、確約をした上での、渡米でした。
しかし、イエス・キリスト信仰は、親族からの勘当を受けても、捨てる事は出来ず、しかも牧師となって日本に帰って来られました。
諌山、エコールグループは、最初は京都で伝道をしておられましたが、日本で最初のナザレン教会となった熊本教会が、呉教会よりも3年前に設立しており、 そこで京都と熊本間の広島へ開拓計画が立てられ、1918年の始めに広島にやって来られました。

しかし、大正時代の日本には、キリスト教に対して、キリシタン弾圧の歴史から、キリスト教には関わりたくないと敬遠され、借家を借りる事は出来ませんでした。 そして、祈り導かれた地が、この呉の地でした。 今の本通り4丁目の魚屋の跡の古家を借りて、伝道が始められました。
呉の地は明治時代から、日本海軍艦艇建造の中心基地として、海軍工廠が建てられ、呉教会開拓の頃は、海軍関係に約2万の人々が働いていて、町は活気に溢れていました。

古い魚屋を改装して、何とか集会が出来るようになると、早速伝道が始まりました。 4人は教会の前に立ち、エコール先生は、トランペットに似た、少し小さく、柔らかい音を出すコルネットの名手でしたから賛美歌を演奏し、エコール夫人が提灯を掲げて歌い、諌山夫人が太鼓を叩いて、人々の注目を引き寄せ、人々が集まった所で、諌山先生が聖書の話しを始め、集会の案内をするというものでした。

諌山先生は、そうして始めた早天祈祷会に、

「初日に、18名の青年達が集まった」

と記されています。 ところで、諌山先生が、立身出世する事を夢みて、アメリカに渡りながら、イエス・キリストの福音に触れると、親族に勘当されても、その信仰を捨てる事無く、それも、牧師となって日本に帰り、伝道されたのは何故でしょうか、また、エコール宣教師夫妻は大正時代の日本とアメリカの生活の差は、今日の私達の想像を超えた不自由なものであったにも拘らず、言葉も生活習慣も全く違う、予想以上の苦労を

負わなければ成らない日本伝道に、何故、人生を賭けてイエス・キリストによる救いを宣べ伝える為に、日本に来られたのでしょうか。
それは先生達が信じた信仰にありました。

キリスト教の信仰は、神様が人類の歴史を通して、啓示された御心を口伝伝承から、文書化し、歴史に耐えて真に神様の御心を示したものだけを聖書として編纂し、正典としました。
キリスト教信仰は、その聖書に立った信仰です。
その聖書は、
『この世界は自然発生的に出現したものではなくて、創造主がおられ、そのお方を神と呼び、真の神様とは創造主なる神様である』
と宣言しています。

創造主である神様は、永遠を支配しておられるお方ですが、時間と空間の中に、一つの麗しい世界を造られました。 神様はその麗しい世界を更に、愛と喜びに成長させて行く為に、その愛を築いて行く相手として、私達人間を創造されました。 全き聖、全き愛であられる神様は、人間を心から愛されると共に、人間もまた、
『神様を心から**愛し**、**敬い**、**全信頼して**、**神様に聴き従うことを望まれました。その相互の信頼と愛によって**、世界を麗しく**成長させよう**』
とお考えになりました。

そこで、人間の祖に対して、
『人間は神様に造られた存在であり、自分の分を弁え、神様に絶対的信頼を置いて聴き従う』
ように、一つの禁止をお与えになりました。
ところが人間の祖は、神様に敵対する存在、聖書はサタンと呼んでいますが、その誘惑者の言葉に惹かれ、神様の言を疑い、神様が禁止された命令を破ってしまいました。

人間の祖は、それが如何に重大な罪であるかを知りませんでした。 そこから人間の歴史に罪が入り込んで来たのです。 罪が闊歩する世界を**人間自身が招いた**のです。 罪は罪を生み、時間を重ねる毎に、歴史を重ねる毎に、罪は大きく複雑で、処理不能になっていきます。
人間の祖は、その様に神様に叛いた事が、
『サタンと手を結び、サタンの支配下に、罪を犯してしまう、**罪の奴隷となってしまった**』
ことに、気付きませんでした。 しかし、サタンに結ばれた以上、サタンと運命を共にする以外にありません。 その行き着くところは、永遠の滅びです。 それが如何に**暗黒**と**混沌**、**悲嘆**と**絶望**の世界であるかは、人間には想像出来ない、**神様しか解らない**ものでした。

神様は、愛し信頼し期待した人間が、その様な滅びに向かう事を見過ごしにされる事は出来ませんでした。
『何としても、人間を永遠の滅びから救いたい』と、お考えになったのです。 その人間に対する愛の心は、三位一体であられる神の御子も、一つ思いであられました。 人類を罪の奴隷から解放されるためには、
『全人類の価値に優る、神の子の命で贖う』
以外に方法はありませんでした。
人間の罪深さは、
『神様から命と人生を貸し与えられているのに、それを自分のものにして、自己中心に生きて罪に汚してしまった』
ことです。 人間は自分の命を献げてもそれを償う事は出来ないのです。

ただ、神の御子だけが、人類の罪を神様に償い、執り成す事が出来ます。 その為に、人の子となって、この世界に生まれて来られたのが、イエス様です。 イエス様は全ての人の苦しみを、その身に負おうと、人の最も低きに生まれ、生くる悩み苦しみを味わい、神様が人類を救おうとされている、その愛の御心を語られ、病人を癒し、苦しむ者の友となり、遂には全人類の罪を一身に引き受け、身代わりの十字架に架かり、十字架の上で、
「**父よ、彼らをお赦し下さい。 自分が何をしているのか知らないのです**」

と、執り成しをして下さいました。

神様は御子イエス・キリストの十字架の、贖いと、執り成しを受け入れて、人類に罪の赦しを与え、天国の門を開かれた事の証明に、イエス様を十字架の死から3日目に復活させられました。
イエス様は、ヨハネ福音書14章6節で、

「**わたしは道であり、真理であり、命である。**
わたしを通らなければ、だれも父のもとに
行くことができない」

と、宣言されました。

私達の信仰は、このイエス・キリストに掛かっています。 罪深い私達は、自分の努力、修養、善行で、神様に受け入れられるのではありません。 **イエス・キリストの**深い**愛に触れ**て、自分の**罪深さを知り**、キリストに自分の**全存在を委ね**、キリストに**一途に従って行くだけ**です。
それは何も、天国に入る事を目的としているものではありません。 結果的に、

『**神様はそうして下さる**事を**信じています**』

これが私達の信仰です。

つぎに、**私達の希望**は何処にあるのでしょうか。 聖書の宣言は、

「**天地万物は、私達を限りなく愛して**
下さっている神様が造られた」

と記しています。 私達はその神様は、人類がこの世界を汚し、搾取し続け、その結果気候変動による異常気象、激甚災害の頻発、作物の不作など、人類の生命を脅かす様々な事が起こっても、それを尚繕い、守り、支えておられることを確信しています。 どの様な**暗さの中も、神様の守りの御手**を信じ、**希望を抱く**事が出来ます。 唯、神様は、この世界を、時間と空間の中に置かれました。 ということは、創造の

『初めがあり、それは必ず**終結の時が来る**』

と言う事です。 しかし、その終結は、世界を破壊し、壊滅させ、無に帰してしまうと言うものではありません。

聖書の最後は、ヨハネによる黙示録です。
世界の終結を黙示的に綴っています。その終結の為に、永遠の世界に帰られたイエス・キリストが、再びこの世界に、来られる、再臨され、世を裁かれる事を告げています。
ヨハネ黙示録の21章3、4節に、

「**わたしは玉座から語り掛ける**
大きな声を聞いた。
『見よ、神の幕屋が人の間にあって、
神が人と共に住み、人は神の民となる。
神は自ら人と共にいて、その神となり、
彼らの目の涙をことごとくぬぐい取って
くださる。 もはや死はなく、もはや悲し
みも嘆きも労苦もない。 最初のものは
過ぎ去ったからである』」

とあり、ここにはイエス・キリストによってもたらされる**神の国の到来**が約束されています。

キリスト者の希望は、そこにあります。 自分の人生が、また世界が、希望の見えない暗さの中におかれても、

『世界を、また、弱い自分を、神様は
守り支えていて下さいます。 そして
遂には、キリストによって、その暗い
罪の世界に代わって、**神の国がもたら
され**、イエス・キリストと顔と顔とを合わせて、
相見える時が来るのです。』

キリスト者の奪われる事の無い**希望**は、**そこにあります**。 イエス・キリストは死の彼方、この世界の彼方まで保証して下さるお方なのです。
この信仰に賭けて行く所に希望があります。

ヘブライ人への手紙11章1節に、

「**信仰とは、望んでいる事柄を確信し、**
見えない事実を確認することです」

とあります。 **信じて**それに賭けて、**希望を抱き続け**て行った**者だけ**が、遂にはそれを**得る事が出来る**のです。

最後の課題は、**愛です**。 世界の創造も、人間の創造も、イエス・キリストによる、人類の贖いも、全ては**神様の愛から始まり**ました。
ヨハネの手紙Ⅰ、4章10節から、

「わたしたちが神を愛したのではなく、
神がわたしたちを愛して、わたしたちの
罪を償う犠牲として、御子をお遣わしに
なりました。 ここに愛があります。
愛する者たち、神がこのようにわたしたちを
愛されたのですから、わたしたちも互いに
愛し合うべきです。 いまだかつて神を
見た者はいません。 わたしたちが互いに
愛し合うならば、神はわたしたちの内に
とどまって下さり、神の愛がわたしたちの
内で全うされているのです」
と、勧められています。

キリスト者の**愛の原点**は、
『**イエス・キリストが**このわたしの全存在を
救うために、わたしの罪を引き受け、
身代わりの十字架に架かって**死んで
下さり**、わたしの罪を贖い、赦し、**神の子の
身分**を**与えて**下さった。』
そこにあります。 それ程の大きな愛を受けた
その愛に押し出されて、**他者を愛する**のです。

私達はコリント人への手紙Ⅰ、13章の愛の
課題を突きつけられますと、
『とてもそのような愛の人にはなれない。
自分にはそんな愛は無い』
と、自分を叩いてしまいます。 しかし、私達は、
足りないながらも、赦し合い、愛し合い、**百年の
歴史を刻んで来た**のです。 **キリストの愛がな
かったなら、百年の歴史を刻んで来る事は出来
ません**でした。 キリストの愛に答えたくて、
『わが家の戸を閉じても、
教会の戸は閉じない』
と教会を守り続けて来たのです。 **キリストに繋
がった愛があったから**、癌になった牧師を、
心から愛し、労(いたわ)り、
『先生は、わたしたちに、**イエス・キリスト
の苦しみを示して**おられる』
と言って、キリストに仕えるように、病める牧師を
尊敬し、愛し、御国に送って下さったのです。
キリストに繋がった愛があったから、残された
家族を親身になって守り、助け、牧師に迎えて
下さったのです。 **キリストに繋がった愛が
あったから**、新しい方々が、この群れに加え
られたのです。 **皆さんには、キリストにある
信仰と、希望と、愛があります**。

どうかこれからも、キリストにある一致を保ち、
信仰と、**希望**と、**愛**に**生き続け**、更に**神様の栄
光を現す教会となって下さい**。 お一人お一人
の上に神様の限りない祝福をお祈り致します。

お祈りを致します。
愛と憐れみに富み給う天の父なる神様。

52年の永きに亘り、この教会に仕えさせて
下さり、内、31年間、御言葉を取り継がせ
て下さった恵みを心から感謝致します。

この呉ナザレン教会を、百年を越えて愛し、
導き続けて下さったご愛に感謝致します。
教会員は皆、心を合わせ、神様を仰ぎ、
イエス・キリストを信じ、信仰と希望と愛に
生きてきました。 どうかこれから後も、
キリストに繋がり、信仰と希望と愛に生き続けて、
さらに成長し、教会の輪を広げ、神様の栄光を
現す教会と成らせて下さい。

お一人お一人の上に、
主の更なる祝福をお注ぎ下さい。

私達の救い主、イエス・キリストの
聖名によってお祈りを致します。
アーメン。